

巻頭対談【完全版】

# 学びの空間は 図書館をどう変えるか？

山内祐平<sup>1</sup> × 柴田正良<sup>2</sup>

中央図書館にラーニング・commons KULiC- $\alpha$ が出来て1年あまり。設計監修をして頂いた山内祐平東京大学准教授が来館されたのを機会に、柴田附属図書館長との対談を行いました。話は学習空間のあり方、図書館員の専門性から渋い大人の集まるバーの話まで…多岐に及びました。附属図書館報「こだま」第175巻では、ページ数の制限もあり、要約版を掲載しましたが、非常に示唆に富む充実した内容になりましたので、今回は関連する写真や注記を追加したフルバージョンも作成することにいたしました。ラーニングcommonsを中心とした学びの空間やこれからの図書館と図書館員についての自由で刺激的な対談をお楽しみください。

- ・ 対談場所：金沢大学附属図書館中央図書館3階オープンスタジオ
- ・ 対談日時：2011年5月13日
- ・ 司 会：山田政寛（大学教育開発・支援センター准教授）
- ・ 編 集：橋 洋平（情報サービス課専門職員）



柴田正良附属図書館長



山内祐平東京大学准教授



対談風景。右端は、司会の山田政寛大学教育開発・支援センター准教授

<sup>1</sup> 東京大学大学院情報学環学際情報学府准教授。専門は、学習環境デザイン。

<sup>2</sup> 金沢大学附属図書館長，人間社会研究域人間科学系教授。専門は、心の哲学，行為論，倫理学。

## 劇的ビフォーアフター 空間は人の思考を変えるか？

■**司会** 1年半ぶりに図書館を見学されていかがでしたか？

■**山内** 劇的に変わりましたね。前に来たときは現在のカフェ付近はシーンとした感じで、人が集まるのか若干不安がありました。今日は感動しました。同じ図書館だろうか？と思いました。人の数が全然違います<sup>3</sup>。勢いがある、素晴らしい空間になりました。毎日見ていると分からないと思いますが、ビフォーとアフターで劇的な変化です。

■**柴田** 使い勝手や入っているもののセンスも良いですね。コラボスタジオ<sup>4</sup>を一度使っていると、普通の教室とは相当違うと感ずますね。

ところで、ちょっと分からないのですが、空間であるとか道具は、人の思考をどれくらい変えるものでしょうか。例えば、「心地良い」「リラックスできる」といったことは、学習効果や、アイデアの良さに結び付くのでしょうか？

■**山内** いきなり本質を突く質問ですね。このことを効果検証したい人は多いのですが、難しい問題です。いちばんの悩みでもありません。ロジック的には「風が吹けば桶屋がもう



改装前(衛星放送コーナー)



改装後

図1 改装前後のブック라운ジの比較



予約なしで利用できるオープンスタジオ。可動式机・椅子とプロジェクター、ホワイトボード、無線LAN等の設備を完備



予約して利用するグループスタジオ。8人用と6人用の2部屋があります。

図2 コラボスタジオ

<sup>3</sup> KULiC-α完成後、2010年度、中央図書館の入館者数は約25%増加した。

<sup>4</sup> 中央図書館3階にあるグループ学習やプレゼンテーション演習など、多様な学習形態を支援する空間。予約なしで利用できるオープンスタジオと予約して利用するグループスタジオ(A・B)がある。可動式机(Free)とガラスの仕切り(Visible)が特徴。

かる」式のところがあって、間に「人が集まり、コミュニティができ、活動を共有して、その中からアイデアが出る」といったいくつかの前提要因が入ります。いくつか段階があるので、空間だけ、いわゆる箱モノだけを作っても、魂が入らないとダメですね。そうならないためには、この空間にどういう人集ってほしいのか、どういうことに起きて欲しいのかを読んでおくことが必要です。ただし、予想を超えた、思いもよらない出会いなどが出てくるのも空間の面白いところ。予想を超えたものが出てくるダイナミックなプロセスの基盤にあるのが空間ですが、空間だけあれば全部が自動的に出てくるということは多分ないでしょう。

■柴田 こちらが見越したこと以上の結果が出現してくるという点については、ブックラウンジで研究発表が行われた時に面白いと感じました。我々の世代だと、研究発表は、閉じられた空間で雑音をシャットアウトして、聞きたい人が集中して発表を聞くのが一般的だと思ってしまうのですが、カフェでやると、聞きたい人とあまり聞きたくない人がなだらかに連なってきます。

このことはマイナス面かと思っていましたが、大道芸を見るような感じで、知らないうちに頭に入ってくるような境界線付近にいる人、ほんの少ししか言葉が分からない人、前の方で真剣に聞いている人たちが全体でイベントを共有するという形が出来ていたのは新鮮な驚きでした。

■山内 これは学習共同体の構造を可視化した形になっていますね。そのトピックに関するコミットメントの度合いが空間の中に可視化されています。

■柴田 いろいろな人がいるのを排除してない。

■山内 そして引き込まれていく。



図3 ブックラウンジでのイベント光景（2010年5月EUカフェ）。奥にいるのが講師。周囲の人は真剣に聞いているが、手前の人たちはほとんど聞いていない。

■柴田 そうい構造の方が良いのかもしれない。ブックラウンジの壁面をギャラリー<sup>5</sup>にすることも思いつきましたが、そのことによって新しく人を引き寄せることが出来ました。空間の持つ人を惹きつける力の面白さを経験した1年間でした。



図4 ギャラリーα (2011年1月金沢美術工芸大学と共催した展示の準備光景)

## スタジオ型教室での協調学習 最近の大学生のディスカッション

■柴田 もう一つ思ったのは、やはり箱モノだけではだめだということです。間に学習スタイルや共同で考えるスタイルについて、媒介する「何か」がないとだめなのではないか、と思っています。今まで、我々が経験してきた学習や共同作業のスタイルとちょっと違うものですね。そのイメージについて、私にはまだよく分からないところがあります。そういうものを持たないと、コラボスタジオなどはどう使うか難しいのではないかという気がします。

■山内 ちょっと話は違うかもしれませんが、スタジオ型の教室については、使える先生と使えない先生がいます。使える先生は部屋の中を自由に歩き回れる人。使えない先生は前から動けない人です。体でコントロールできる人と固まっていてダメな人がいますね。人によって合う、合わないの感覚が違います。スッと空間になじむ人とそうでない人がいます。



図5 オープンスタジオでのセミナー (2011年1月、山田政寛先生によるプレゼンテーション・セミナー)。奥に写っているのは別グループ

■柴田 それは個性でしょうか？西洋と日本

<sup>5</sup> ブックラウンジの壁面にスポットライトを取り付け、展示スペースとして改修し、ギャラリーαと名付けた。

の違い、年齢による違いというのとも違う気はします。

■**山内** 個人の価値観が関係している気がします。図書館には多様な価値観を持つ人が集うわけで、こういうオープンスタジオのような空間に合わない人も当然います。新しい図書館になっても、従来の図書館の「静かな空間」は絶対に排除してはいけない。今まではそういうスタイルしかなく、従来の図書館では、にぎやかにやりたい人が阻害されていましたが、この空間が出てくることによって、その人たちのポテンシャルを発揮できるような、多様な場が生まれたことになります。

■**柴田** にぎやかにやるスタイルには何か名前は付けられていないんですか？

■**山内** 学習については、協調学習という言葉が一般的ですね。

■**柴田** だけど何かしっくりこない気がしますね、その名前は。もっと秘めたる力があると思う。

■**山内** 私もそう思います。この部分については、教育学などのアカデミックな集団がポテンシャルをすくい切れていません。これについては自覚をしていて、言葉や概念を作らないといけない時期に入っていると思います。

■**司会** オープンスタジオで授業をやっていて違うなと感じるのは、同じ部屋にいる他の人が気になっていて、後で質問しに来たり、資料を下さいと言って来たりすることです。協調学習の設計については、「視覚化」ということが言われますが、この空間だとお互いのアイデアや何をメモっているのかといったことが見えてしまいます。そういうことをこの空間は促進させています。この部屋を使った私の授業では、自分が教えていることに対して、アウトプットをさせていますが、固定された黒板と机のある部屋では難しいことがここでは行いやすくなっています。お互いに面白いねと言い合いながらやる、というのは大きいですね。

■**柴田** そういった場合、誰かが言ったことに誰かが反応して、意見交換をする形になりますが、我々の世代だと議論は居合い抜きのようになってしまいます。一撃必殺のように構えてしまい、向こうも構えていて、

どっちが勝つかみたいな真剣勝負になってしまう。我々の世代だと、アイデアを共同で作りに上げていく感じがないんですよ。今の若い人はどうなんですかね。ものすごくナイーブで、自分の考えを大事にしているけれども、裏側にある部分までをさらけ出せないところがある。先生方から見てどうでしょうか。

■**山内** 多分、大学によっても地域によって差があると思います。

■**司会** 金沢大学の学生は引っ込み思案で、自分で考えながらやる人が多いですね。私の実感では、中を大事にしているという学生が8割ぐらいじゃないでしょうか。

■**山内** 東大の学生はよくしゃべります。ただし、空気を読みながら、回りと離れないようにしゃべり、本音をさらけ出して戦っている感じはありません。それでは面白いグループディスカッションにはならないので、対立構造を作って煽ったり、ケーススタディで報告させるときに、「~のつもりで発表してください」といった仕掛けを作って発表をさせることがあります。「戦わせること自体が楽しいんだ」という雰囲気にしたら、段々と本音が出てくるようになってきます。そういう雰囲気が空間上のレイヤーに出ると、空間のパフォーマンスがさらに増すのではないかと思います。

■**柴田** 教育学的に考えた時に、協調学習とかグループディスカッションでどこまで本音を出すことを想定しているんですか？哲学の理論的な問題については、ゲームのような部分がありますが、倫理的な問題だと、自分がどういう価値観で生きているかがモロに出てしまうので、とたんに重いディスカッションになってしまう。あんまりやると結構しんどい。真剣にやると傷つけあってしまうことがあります。ロールプレイングだと、その役になり切れれば本人たちも痛みを感じないと思いますが、それはディベートの技術ですよ。

■**山内** それに関してですが、実は、日本の小学校では、外国に比べても議論活動を盛んにやっています。ところが、中学校に入った途端、質問も話もしなくなり、黙って勉強するためのスタイルに極端に変わってしまいます。学問的に立証したわけではありませんが、大学生は、中学・

高校の6年間、ディスカッションについては何もやらず、中学生っぽい雰囲気のまま大学生に入ってきている気がします。これが大人しい原因だと思います。だから、中学生のようにナイーブに反応してしまいます。欧米の大学生は、この6年間に「血」を流してきているので、傷ついてもあまり血は流れなくなってきましたが、我々が接する時には、傷つけないようなファシリテーションが必要になってきます。

## 学習空間へのアフォーダンス概念の適用

---

■柴田 そういったときに、空間は何をもたらししてくれるのでしょうか？

■山内 そこは多分、空間の問題ではないでしょう。すべて空間で説明できるわけではない。ただし、空間は経験の蓄積でもあるので、「こういう空間でこういう経験をする、こういう話し方をしてもいいだろう？」という形で歴史としてアフォーダンス(Affordance)<sup>6</sup>が蓄積するということは起きると思います。それが起こってくると、ファシリテーター(facilitator)がいなくても、「ここは大丈夫かな」という記憶が出てきて、うまく行くということがあると思います。

■柴田 そちらの業界でもギブソン<sup>7</sup>のアフォーダンスなど、その種の問題でまとめることはあるんですか？

■山内 そうですね。空間と学習の間には段階が多く、しかも空間に適應できる人間の理論や説明言語は意外に少ないので、アフォーダンスという言葉を使うことはあります。本来、アフォーダンスというのは、学習などの高次の認識活動ではなく、知覚についての話ですが、それをメタファーとして使わないと説明ができないんです。デザイナーやアーテ

---

<sup>6</sup> 環境がそこに生活する動物に対して提供する価値や意味。生態心理学の用語（『認知科学辞典』共立出版,2002）

<sup>7</sup> ジェームズ・ギブソン（James J. Gibson, 1904-1979）。アメリカの心理学者。アフォーダンス概念を提唱し、生態心理学の領域を開く。

ィストも他に使える言語がないのでアフォーダンスという言葉を使いたがりますね。

■柴田 机の形や光沢といった「見え方」が、人の考え方を誘発して導いてくれたり、挑発したりする、という考え方を使いたいということですね。それは実感としてどうでしょうか？同じような質問になりますが、例えば、知的作業についてどのくらいモノが挑発してくれるものでしょうか？

■山内 ダイレクトに学習をアフォードすることはなく、何らかの知覚をアフォードして、その知覚が学習につながるということだと思います。ある議論をしていて、ふとホワイトボードのような学習リソースが目に入る。そのときに「あっ」という発見があり、フィードバックされるということはあると思います。それは、こういう教室でないと起こらないでしょう。人が動くことで、挑発的な環境になる可能性があるということです。その時、意外に「声」が大事だと思います。ギブソンは視覚論が中心ですが、それと同じように、声がフッと耳に入ることがあります。そのことを考えているから、フッと耳に入ることが思考に反映する。聞こえていないものが耳に入った時に、アレっと思って、無意識のうちに思考が展開したりする。検証するのはなかなか難しいのですが、現象を見ていると、意外にこういうことが起こっている感じがします。

■柴田 雑音ではなく、うるさいと感じる時には、本当は、興味を持ってしまっているということ？

■山内 そうですね。そういうパターンはありうると思います。

■柴田 人の声も何かをアフォードする？

■山内 そうですね。カフェなどで、隣の人の声が聞こえてきたり、聞こえなくなったりすることがかなり大切じゃないかと思います。機械的にオン・オフするのとは違う、もっと微妙なものですね。あまり大きすぎる場合は、調整する必要はあると思いますが、人の声はあった方がよいのではないかと思います。これは空間デザイナーの一つの仕事になる気がします。



■柴田 この説は、「勉強中はテレビを切れよ」と注意している世の受験生の親を敵に回すかもしれないですね。

■山内 何を学習と規定するかだと思います。単純に覚えるだけならば、集中した方が効率かもしれないが、大学で学ぶことはきっとそれだけではない。人との話し合い中で何かに気づいたり、新しいことを作り上げたりすることを学習と考えると、知的な空間をどう考えるかということとは、大学にとってはすごくクリティカルなことだと思います。

## 多様な空間の必要性

---

■柴田 それでは、もう少し挑発的にいきたいと思います。山内先生のエッセー<sup>8</sup>の中にあっただと思いますが、「新しいイノベティブなことをやるのは、1人の独創的な天才がやっているというよりは集団の力である」というのがありました。

■山内 そこまで読まれていましたか…。

■柴田 一人の独創的な天才とか卓越した将軍のような存在を、こういう空間は拒否しているということないでしょうか？こういう空間は1人の天才ではなく、集団的に何かいろいろやることをアフォードする、という以上に強く要求していませんか？ある種の空間のタイプとか場所は、思想の内容まで選択している…

■山内 それはそのとおりだと思います。

■柴田 たとえば、独裁的な思想を拒否する空間。

---

<sup>8</sup> 山内祐平(2011)「キース・ソーヤー『凡才の集団は孤高の天才に勝る』(ダイヤモンド社, 2009)の推薦文」

[http://blog.iit.u-tokyo.ac.jp/ylab/2011/03/post\\_293.html](http://blog.iit.u-tokyo.ac.jp/ylab/2011/03/post_293.html) (2011年8月3日最終確認)

■**山内** この空間スタイルは、まさに「メディアはメッセージだ<sup>9</sup>」ということだと思います。

■**柴田** 先ほどは控えめにおっしゃっていましたが、空間というのは、従来考えられていたよりももっと強い力を暗黙のうちに働かせている感じもします。

■**山内** グループ・ジーニアス<sup>10</sup>の話は、最近、ソーヤー(Sawyer, R.K.)という認知科学の人が言い始めていることです。一人で生んでいるように見えても、実際には、その後ろ側にコミュニケーションとかネットワークがある。その一部では、こういう空間は機能すると思いますが、さっき言ったとおり、やはり多様性が必要です。こもったり、隠れたりする空間も必要ですね。ここはあまりにもオープンで明るく、隠れられないですよ。洞窟みたいなところも必要だと思います。大学はこれまで、講義は一つのスタイルしかありませんでしたが、それは多様化の一形態に過ぎません。逆にその中で、ずっと一人で悩むことのできる空間もあった方がいいと思います。東大には、古い建物の下など、実は洞窟みたいなところが沢山あります。そういうところで、一人でボーっとしていることも大事で、そこで気づいた後、こちら側に来てネットワークしたりということが非常に重要です。こういう空間だけで全部をカバーできるとは、思っていない。

■**柴田** そう言っていただいて、少し安心しました。洞窟型というか独居型のようなタイプの思考は必要だと思いますが、これは何と名づけられていますか？

■**山内** 型ではありませんが、僕らの言葉だと「リフレクション(内省)」と呼んでいます。「コラボレーション(協調)」とセットの概念です。この2つの往復運動が必要です。内省のない協調はありえない。ただ、人間は面白いもので、このオープンスタジオのような場所でも、空間と

---

<sup>9</sup> カナダの英文学者・文明批評家マーシャル・マクルーハンによる主張

<sup>10</sup> グループゆえに生まれる天才的発想(キース・ソーヤー著、金子宣子訳『凡才の集団は孤高の天才に勝る』ダイヤモンド社、2009, p.v)

は関係なく、一人になれたりします。回りが見えなくて聞こえないという状態です。一人かどうかは必ずしも空間の型とは一致しません。洞窟の中で過去の偉人と対話しているということもあるかもしれませんね。

■柴田 空間からアフォードされたり促されたりするけれども、決定はされないということですね。

■山内 そうです。

■柴田 最終的にはどういう思想にコミットするか…

■山内 その自由は奪えません。ただ洗脳だけはそれを奪えます。重要なのは、教育を洗脳にしてはいけないということです。選択の自由は学習者にとって、この空間が嫌いだったら行かない自由を担保しなければならない。そういう意味でも、多様性も必要なのだろうと思います。

■司会 MITもそうですね。同じ授業をTEAL<sup>11</sup>と普通の講義型と2種類用意しています。

■山内 1つだけではだめで、いろんなスタイルの併用の必要があります。テストの点数を上げたいというだけではなく、学生の中には先生の雑談を聞きたいという人もいます。その中に大切なことが含まれていたりします。一つのことに集中するような授業だと雑談は出ないですね。講義型、私は劇場型空間と読んでいますが、そういう講義室でないと雑談は出ないですね。やはり両方いるかなと思います。

## 図書館に苦み走った大人が集まるバーが欲しい

---

■柴田 話はそれますが、MITの雑談の話が出たので思い出しました。先生の書かれたものの中に、MITに夜から開くバーがあって…

■山内 何でそんなにお詳しいんですか。確かに書きました<sup>12</sup>。

---

<sup>11</sup> Technology-enabled active learning。マサチューセッツ工科大学にある学部学生対象の物理教育のための教室。 <http://icampus.mit.edu/teal/>

■柴田 その中で「ため」が重要と書いているのですが、私はそれを読んで感激しました。カフェの次に作るのはバー、と思ったくらいです。

■司会 東大にはバーはありますよね。

■山内 農学部の中にありますが、キャンパスの真ん中の図書館辺りにバーができるととても良いと思います。

■柴田 サイエンス・カフェにサイエンス・バー。金沢大学でできるかわからないんですが、ちょっと大人の雰囲気というか、研究者という変な人種がいて、そういうのが人生やら自分の研究やらをしゃべっている大人の空間。図書館に若い学生さんが沢山来ていいんだけど、苦み走った部分も欲しいなと、密かに思っているんですよ。

■山内 よく分かります。これも空間の多様性の一つですね。大学はもちろん学生がいっぱいいる場所ですけども、学生が集まって学習が起きるのなら教員はいらなくていいですね。教員がいて、異質な人たちや異質な文化との葛藤があるから面白いんだと思います。ここが完全に若い人の空間になったら、そういうことは起きなくなります。ある場所ではすごく苦み走ったいい男が集まったバーがあり、大学院生がたまに誘ってもらい、「こんな会話してたんだ」と実感するというのは結構大事だと思います。

■柴田 それができればいいかなあと思っているんですけどもなかなか難しいですね。

■山内 これに関して一つ悩みがあるのが、街との関係です。都市に開かれた大学だったら、街の中に普通にあっておかしくない話なんです。ところが、東大は塀の中にあるので、街なかに出てしまうと、先生は帰ってしまいます。キャンパスの中にそういう場があり、2次会で外に出ようかという感じにしないと、難しいですね。いきなり街に頼れないところが悩みとしてあります。キャンパスとしては街とネットワークして

---

<sup>12</sup> 山内祐平(2011) 「仕事をより面白くするオフィス」

[http://blog.iii.u-tokyo.ac.jp/ylab/2011/05/post\\_302.html](http://blog.iii.u-tokyo.ac.jp/ylab/2011/05/post_302.html) (2011年8月3日最終確認)

いる方が良いのかもしれませんが、今の日本の大学はそういう空間構造になっていません。どうしても中である程度、こういう場所を担保せざるを得ないかなという気はします。

## ラーニングコモンズ内のサポートデスクの難しさ

■柴田 1年間経って、このように図書館は大分変わったんですが、同時に、「ここはこうした方が良いのでは?」「ここはどうだろうか」というところはないですか?

■司会 金沢大学だからというアドバイスはありますか?

■山内 金沢大学には限りませんが、ラーニングコモンズ<sup>13</sup>(LC)のサポートデスクというのは難しいですね。LCの学習支援をどう考えるかという本質的な問題に関わる点です。日本のLCは、アメリカのLCを直輸入しています。もともとアメリカのラーニングセンターやライティングセンターなど一種のチュータリングサービスみたいなものを直輸入しているところがあり、どの大学でも苦労しています。アメリカの場合、チュータリングの専門性を育成する仕組みとか学会とか研究会とかがいっぱいあって、そのノウハウをマニュアル化しています。アメリカ人はそういうのが大好きなので、サポートデスクがうまく展開してい



図6 オープンスタジオ内のサポートデスク。2010年度後期は、試行的に、職員と図書館ボランティアの学生が交替で座っていたが利用頻度は多くなかった。

<sup>13</sup> 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会 『大学図書館の整備について(審議のまとめ):変革する大学にあって求められる大学図書館像』2010年12月では、次のように定義している。「複数の学生が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの。その際、コンピュータ設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを使った学生の自学自習を支援する図書館職員によるサービスも提供する。」

ますが、日本ではそうではなく、いきなり図書館の人たちが学習支援のことをやらないといけなくて、どうすればよいのかわからないというところはありますよね。

もう一つ、日本の大学とアメリカの大学では狙っている学習が違うので、LCも必ずしも同じにしなくてもいいのかなとも思っています。アメリカの場合、数学とか物理とかの学習支援のようなものがありますが、日本のLCは、みんなでわいわい話しながら何か出来ればいいよね、みたいな形になっています。そういう意味では、自主的な研究会みたいなものがいっぱい出てきて、その研究会を間接的に支援する形でサポートデスクが動くようにするとかというのが日本型の支援の形として考えられるのではないかと思います。あまりダイレクトに1人が勉強できないから、その人に対して、家庭教師をつけましょう、みたいなサポートデスクは、うまくいかないかもしれません。

■柴田 金沢の場合も、基本的に要求があまりなく、こちら側で頑張っても、それほど必要とされていないという感じです。それは、うちの大学の授業や講義が学生に何を求めているかの反映だと思います。サポートデスクを必要とするような感じで動いていないので、なきゃないで何とかなっている。だけど何かサポートしなくちゃというものもあって、そこが何か空回りしているところがあります。

■山内 日米で評価システムが違うのも大きいですね。去年、私はアメリカのラーニングセンターの視察に行き、Frank L. Christ Outstanding Learning Center Award<sup>14</sup>を取ったテキサスA&M大学の人たちと話をしました。その時、大学内の掲示板に、家庭教師募集のチラシが沢山貼ってあるのを見ました。結構時給も高かったですね。アメリカの大学の場合、入れるけれども出られない。途中で単位を落としてしまい、進級しないと卒業できないというプレッシャーが大きいので、もともとお金を出して家庭教師を雇ってでも勉強しなくては、という人が多いようです。これだとお金を持っている学生はいいが、チュー

---

<sup>14</sup> 2008年にテキサスA&M大学のStudent Learning Centerが受賞。このセンターのサイトのURLは次のとおり <http://slc.tamu.edu/>

タリング・サービスを受けられない学生も出てきます。これをパブリックサービスで行わないとまずいだろうということで、1990年代以降、そういう話が出てきました。日本の大学の場合、授業に出ていると、温情で通ってしまうことがあったりしますが、そのシビアさの差がチュータリング・サービスの要不要に影響していると思います。

■柴田 それを考えると日本の場合、そういうサービスを欲しがっているのは、留学生なんじゃないかと思います。その意味で、留学生に特化したサポートデスクもいいんじゃないでしょうか。留学生のための日本語支援も必要だし、図書館側としても技術を磨く機会にもなると思います。

■山内 そうですね。その逆も考えられます。近年、どんどん国際会議で発表して、国際的な業績を増やさないといけないというプレッシャーがありますが、どうやって英語の論文を書けばよいのかについてのサポートがなく、結構、みんな苦労していると思います。お金を持っている研究室は、外部に翻訳を出したり、先生に教えてもらったりということをやっていますが、結局、貧富の格差で、貧しいところは自分でやっていかざるを得ず、なかなか大変です。留学生には英語のできる人が多いので、そういうところで日本人学生と留学生が相互に貢献できる仕組みを作ってあげると、非常に面白いことができると思います。

■司会 先ほど、この部屋でも、実際にそういうことをやっている人たちがいましたね。

■山内 お互いにウィン・ウィンになる学習の仕方もあると思います。

■柴田 留学生はこれから増えることはあっても減ることはないと思うので、そこにターゲットを絞ってやるというのは、一つの方法だと思います。

## 学内センターとの協力関係

■**司会** いろいろな大学の事情を聞いたりすることがありますが、金沢大学では、センターの間の仲が良いですね。大学教育開発・支援センターみたいなのと総合メディア基盤センターや図書館みたいなのところは対立構造的に言われたりすることがあるんですが…

■**山内** みんな協力的にやれていて素晴らしいと思います。もともとLCは、図書館が図書館だけにこもらずに、図書館こそ大学の教育の中心でありシンボルとなるように全学の人たちをネットワークするある種のシンボルとなる場所として構想されたものです。そういう意味では、こうやって、自然に山田先生が図書館に来ているように、そのことが自然にできているのは、すごいと思います。

■**司会** ギスギスしたところがないですね。大学教育開発・支援センターと留学生センターも共同でイベントをやったりしています。留学生センターにもLCに来てもらったらいいかもしれませんね。

■**柴田** それは何故だかよくわかりませんが、うちの大学には、「ほんわか」とした感じがあるんですかねえ。

■**司会** 本当にそうなんです。柴田館長だからできていることも多いと思います。センターの人が図書館に入り込んで学習支援ができるのもそうです。

■**山内** カフェについても、柴田先生の情熱が通じて出来たと思います。正直、この山の上にカフェができるのか大丈夫かなと思っていましたが、素晴らしいものが完成しているのを見て感激しました。柴田先生がいらっしゃらなかったら、絶対あのカフェはできなかったと思います。

第10回 学生・学習支援研究会

### プレゼンテーション ・セミナー

プレゼンテーションのコツを教えます

日時 7月20日(水) 14:45~16:15

場所 中央図書館3階 オープンスタジオ

講師 山田政寛准教授

(大学教育開発・支援センター)

対象 学生



主催 金沢大学教育開発・支援センター 共催 金沢大学附属図書館

図7 大学教育開発・支援センターと図書館の共催で行ったセミナーのポスター



## 電子図書館時代の図書館員の専門性 ～図書館附属大学へ

---

■柴田 そのことは置いておいて、先ほど、図書館が大学教育の中心という話題が出ましたが、実は、大学図書館員については危機的な状況にあり、外部委託をしてどんどん人を減らしましょうという話もあります。いろいろなところで議論をしていると「図書館員には専門性があるんだよ」ということを盾に、「そこは余人をもって代え難し」と主張する人が多いんですが、かなりの部分、外部委託で出来てしまいそうなところもあります。変えられない部分というのは、昔から言われているような専門性の部分ではなく、大学の教育へのコミットということだと思います。つまり、教員自身やらなくてはいけないと思っているんだけどもやりたくない、やっても下手だといった部分に図書館員が食い込み、大学になくてはならない機能として存在してしまう。大学内で図書館員が教育のベースの部分、基礎になるしっかりした部分を教え、我々はそのあとの専門的な部分を連携しながらやっていく、というような形でレーゾンデートル（raison d'être；存在理由）を確保しないと、図書館員の生き残りは非常に難しいのではないかと思います。

■山内 本の電子化がこれから出てきますので、本の管理みたいなことだけだと専門性としてはどうだろう、ということは出てくると思います。多分、本質的に図書館の果たしてきた役割で大切なのは、本を人に使ってもらうことだと思います。つまり、人の記憶を焼き付けたものである図書館がさらに新しい知を生み出す行為に役に立つ、「情報と人をつなぐ」ということがライブラリアンの本質的な専門性だと思います。それが、「人と人をつなぐ」ことにも拡張され、大学の中心になる。そのことを支えるための専門性という風に再定義しないと図書館も職員も、それだったら全部部局でやっちゃうよという話も出てくるかもしれません。

この10年が大学図書館の大きな転機だと考えています。先ほどの電子化の話で言うと、アメリカの工学系の大学では、紙なしの100%電子化した図書館が出てきています。スタンフォード大学で、本のほとん

ど無い、新しい工学図書館を作ったことが話題になっていましたが<sup>15</sup>、その1カ月後にテキサス大学では全部捨てたとのこと<sup>16</sup>。学内会議でもお感じになると思いますが、理系の人たちは「全部電子ジャーナルでも良い。テキストブックもアマゾンなどで電子化されていて、別に紙じゃなくてもいいのではないか」と思い始めています。そうすると、物理的な本が全くない図書館というのは極端で、特に文系学部のある大学では、そんなに簡単に実現するとは思いませんが、それでもかなり比率は変わるでしょう。本が大分減ってきて、本と電子媒体と人の3つの要素がある場合に、これらをどうつなげて知を生み出すのか。文化として蓄積する行為をどうささえるか。そういったことを考えるのが図書館の役割になるでしょう。そのためには、本を見るのではなく、人を見るように図書館職員がならないといけないと思います。随分専門性が変わってくるでしょう。

■柴田 専門性が変わるという自覚が必要ということですね。図書館の人は…とひとくくりで言うてはいけませんが、今までのライブラリアンの定義について、「余人をもって代え難し」と思いたいんでしょうけれども、見ていると世の中の進み方の方が速くて、「貸し本業だったらいけないよ」という状況になりつつあると思いますね。

■司会 情報検索とかを頑張っていた時期もありますが、今はそれもどうかという感じです。

■柴田 専門性として、何が本当に必要にされているか考え直さないといけないと思います。新しく作り出せる時期とも言えます。

---

<sup>15</sup> 「スタンフォード大学、本のほとんど無い図書館を開館」カレントアウェアネス・ポータル 2010年8月5日 <http://current.ndl.go.jp/node/16611> (2011年8月3日最終確認)

<sup>16</sup> 「米国に紙の本が全くない大学図書館が登場」カレントアウェアネス・ポータル 2010年9月10日 <http://current.ndl.go.jp/node/16802> (2011年8月3日最終確認)

■山内 面白い時期ですね。いろんな形を試行錯誤できます。10～20年前には、1年でこんなに図書館が変わるといのは、考えにくかった。今は動くとなるとスッと動きます。

■柴田 これが専門性の新しいパラダイムである、と言うつもりはないのですが、ここは別の自然科学系図書館の方で環境学コレクション<sup>17</sup>というのを作り始めています。第1期は、800冊くらいの紙媒体のコレクションで立ち上げました。環境学というのは、正直いって中身がないようなジャンルです。どういう本を選ぶかということについては、最終的にはそこを使って、地域の人とか初等中等教育を担う人たちにどう環境学の内容を伝えられるかといったことと関連すると思います。これをやれるのは、専門的な論文を書きまくっている人ではなく、全体を見渡しながらか、ある種の「何でも屋」なんだけれども、専門家ではない、でも資料を使って教育のある重要な部分を担う、そういう人だと思います。情報の部分と人の部分との間をいかにうまくつなぐか、そういうことができれば、これまで名前ばかりで実態がなかった「サブジェクトライブラリアン」、この人を新たにこのコレクションに付けてくださいね、といった方向に展開する余地もあると思っています。教育をいかに担うか、ということがないと図書館員もこれからはつらいでしょう。

■山内 理系のライブラリーの扱いが電子化によって変わってきていますが、全部電子化して、工学、理学、医学などの興味のある情報だけがすべて入るといっただけでライブラリーになるかという、それは危ういですね。話は少しずれますが、今回の大震災で分かったのは、いわゆる理系についても、社会と無縁ではいられないということです。そのことがいろんな部分で可視化されつつあると思います。

そのことを考えたら、専門的なことに電子的にアクセスできるというだけではダメで、それらを複合的に広げて、いろいろな人たちとつきあえる何かが必要です。そういう視点を理系のライブラリーに持たないといけないと思います。先程の環境学もそうだと思いますが、単なる電子

---

<sup>17</sup> 金沢大学の中期目標・中期計画で掲げている、学士・修士一貫の環境教育プログラムの基本資料とするために、国内外の環境に関する資料を集めたコーナー

的な窓口じゃないものが付け加わらないと図書館のいちばん大切な文化的な部分が抜けるようで、恐い気がします。

■柴田 言葉のイメージだけで深い意味はないですけども、図書館にも「ため」があるんだろうと思います。そこにいろいろなジャンルの人がいるということが図書館の持っている「ため」であって、そこをうまく生かしているかどうかということが大学の力だと思います。本当のことを言うと私の図書館の最終的イメージは、「大学がなくても存在する図書館」というものです。

■山内 強ければそういうことはありうると思います。

■柴田 我々に求められているのは、今は「大学に必要とされる図書館」なんですけれども、最終的には「大学を必要としない図書館」。それ自体として地域や社会から必要とされる図書館ですね。

■司会 大学図書館というネーミングでなくなりますね。

■柴田 逆に大学は「図書館附属大学」でしょうね。以前、あるシンポジウムでそれを言ったら学長は渋い顔をされていましたが…。

■山内 大学そのものの位置づけも、変わり続けるだろうなと思います。情報化が進展する中で、今までコスト的にアプローチできなかった人たちにも教育を提供できるようにしようというeラーニングの大学が出てきたり、多様化してきています。そうすると、今までのカテゴリーだと大学ではなかったものが大学になってきたりします。これが大学になったとき、今までの大学はどうなるんだろうということは当然出てくるはずですよ。「図書館附属大学」というのも、夢物語ではないかもしれないですね。知を生み出すサロンが大学のコアでその他は大学でなくなってしまう可能性すらあると思います。今は、「ウソでしょう？」ということが結構起きてしまうので、「超未来」的に言うとありうるかもしれませんね。

